

聖書：マルコの福音書 10：23～31

説教題：神にはできる

日時：2026年1月25日（朝拝）

今日の箇所のイエス様のお話は前回の出来事を受けてなされたものです。前の箇所で一人の人がイエス様のもとに駆け寄り、御前にひざまずいてこう尋ねました。「良い先生。永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいのでしょうか。」 イエス様は彼といくつかのやり取りをされた後、最後に 21 節でこう言われました。「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」 ここは多くの人を読んでショックを受ける言葉かもしれません。イエス様に従うためにはここまでのことをしなければならないのか？これでは誰もついて行けないのではないかと。しかしこれはすべての人にそのまま当てはまる普遍的な命令ではありません。これはこの時の彼に向けられた、いわば彼自身に合わせた言葉でした。だとしてもイエス様はなぜこれほどまでに厳しい言葉を語られたのでしょうか。それは一言で言えば、この彼にとっては財産が偶像だったからです。そのことは 22 節の最後にはっきり書いてあります。なぜ彼はイエス様に従わず、立ち去ったのか。それは彼が「多くの財産を持っていたからである」と。仮に多くの財産を持っていたとしても、イエス様に従うことが第一であるなら、その財産は持っていたとしても問題はありません。しかしイエス様が「それを捨てなさい」と言われた時に従えないなら、その人の内ではイエス様よりも財産の方が上に置かれているということになります。つまり偶像です。そういう偶像を持ちながら、イエス様に従うことはできない。何かあれば結局そちらを優先してしまうからです。それでは本当にイエス様を信じているということにはならないのです。

先ほど、この命令はすべての人にそのまま当てはまるものではないと述べました。しかしこの箇所を通して私たちが問われているのは、では「私にとっての偶像は何か」ということです。神のライバルとなり、神よりも上に置いているものはないか。ある人にとっては、この人と同じくお金や財産かもしれません。ある人にとっては仕事や社会的地位、評価かもしれません。ある人にとっては愛する人や家族、友人かもしれません。ある人にとっては趣味や楽しみかもしれません。イエス様に従うために、それらを脇に置きなさいと言われた時に、もし私たちが「それはできません」と言うな

ら、その時点でそれらはイエス様より上に置かれていることになります。つまり偶像です。永遠のいのちを求めてイエス様のもとに来た彼は、イエス様に従って永遠のいのちを得る道を行くのか、それとも財産にしがみつく道を行くのか、選択を迫られました。その結果、彼は財産の道を選んだのです。最後に彼が「顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った」と書いてあったことが印象的です。永遠の命が得られないことに落胆しながらも、なおその偶像から離れられなかったのです。

これを受けてイエス様は 23 節で周囲を見渡して言われました。「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。」 「弟子たちはイエスのことばに驚いた」とあります。当時のユダヤ人の間では繁栄は神に祝福されているしるしだと一般に考えられていました。実際旧約聖書の箴言 10 章 22 節には「人を富ませるのは主の祝福」と記されています。もちろん旧約聖書全体をよく読めば、すべての金持ちが神に祝福されているわけではないことは明らかです。不正を行い、他人を顧みず、神に信頼せずには高ぶっている金持ちにははっきりと批判されています。また反対に「貧しい人＝敬虔な人」とほぼ同義で使われています。それでも多くの人には「豊かさ＝祝福」という部分だけを見ていたのでしょう。ですから、富を持つ者が神の国に入るのは難しいと聞いて、エ～？と驚いたのです。

そんな彼らにイエス様は重ねてこう言われました。「子たちよ。神の国に入ることは、なんと難しいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」 らくだはパレスチナで最も大きい動物の代表で、一方の針の穴は最も小さいものの代表です。つまりイエス様が言われているのは「ほとんど無理」ということです。難しいどころか「不可能だ」ということです。聖書はこのように富が持つ危険性をはっきり語っています。富それ自体が悪なのではありません。しかし富を持つと、私たちはいつの間にかそれに信頼するようになります。富が自分を守り、支え、祝福してくれるかのように感じるのです。誤った安心感がかえって永遠のいのちに入るための障害となり、私たちの魂にとってひどく有害なものとさえなってしまうのです。

さて弟子たちはイエス様の言葉にますます驚いて互いにこう言いました。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」 金持ちでさえ救われないのなら、一体誰が救われるのか。するとイエス様は彼らをじっと見て、27 節でこう言われました。

「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」 これは実にふさわしいやり取りでした。弟子たちは「それなら誰も救われないのではないか」「人間に希望がないのではないか」と行き詰まりの中から叫びました。それに対してイエス様は、その通り、人間の側から見たら救いは不可能である。しかし神においては、そうでない！と言われたのです。「神にはどんなことでもできるのです」と。つまり救いは人間の力や努力によるのではなく、ただ神の一方的な恵みによって与えられるものであるということです。人間の目には絶望しか見えないところでも神においては希望がある。神は私たちを導き、永遠のいのちへ至らせることができるのです。

ではそれはどのようにしてなされるのでしょうか。そのことは今日の箇所では直接語られてはいません。しかしこの福音書全体を通して、それははっきり示されていると言えます。人間の側から考えれば人の救いは絶望的です。しかしその不可能を可能にするために神はイエス様をこの世に遣わされました。イエス様はこの後、神の御心に従って十字架へと進まれます。次回 32～34 節でイエス様は 3 回目の受難予告をされ、45 節では「多くの人々のための贖いの代価として自分のいのちを与える」と言われます。まさにこの、私たちのためのイエス様の十字架上での身代わりの死を通して、神は救いにおいて絶望的な私たちを救うための決定的なみわざを行ってくださいのです。その十字架の死を通して神は私たちの罪を赦し、罪の力から解き放ってくださいます。そしてヨハネの福音書 3 章でイエス様がニコデモに語られたように、私たちを「新しく生まれ」させていただきます。私たちは新しい心、新しい価値観を持つ者とされるのです。新しい心が与えられることについては旧約聖書エゼキエル書 36 章 25～27 節で次のように預言されていました。「わたしは・・・あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」 こうして私たちは頼りにならない偶像を捨て、神に喜ばれる、真に価値あるものを選び取って歩む者とされるのです。この価値観の大転換についてパウロはピリピ人への手紙 3 章 8 節でこう述べています。「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」 キリストの素晴らしさ、そしてキリストが与えてくださる御国の素晴らしさに比べるなら、これまで誇ってきたあらゆる

るものはちりあきた、ごみくずのようなものでしかない——そうパウロは言います。そのように価値観が大きく変えられて、やがて消え去る虚しいものではなく、私たちを永遠の命へと導き入れてくださるイエス様に従うことを何よりも優先して生きる。神はそうに私たちを導き、救ってくださるのです。すでに主への信仰に生きている人々はみな、この「神にはできる」の証拠です。かつての価値観は変えられ、新しく生まれさせてくださる神のみわざにあずかって、他のものすべてを後にしてでも、イエス様に従う者とされた。人間の考えでは不可能なことを神は実際になさってくださいました。このように人の救いは人間の力によるのではなく、ただ神の恵みと力によります。人間には希望がなくても、神にあっては希望があるのです。

さてこのイエス様の言葉を聞いてペテロが 28 節でこう言います。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。」 すべてを捨てて主に従うなど不可能と思っていたけれど、イエス様の言葉を聞きながら良く考えてみると、自分たちもいつの間にかすべてを捨てて主に従って来ていた。金持ちのように多くの財産を持っていたわけではないが、それでもすべてを捨てて従って来た。その神の不思議な導きと力に気づいたのかもしれませんが。同時にここには「自分たちにはできている」と少し得意になる弟子たちの心もあったかもしれません。特にマタイの福音書の平行記事からそのことが伺えます。しかしイエス様は彼らを咎めることなく、むしろ主に従う者に与えられる素晴らしい報いについて語られました。「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は」とあります。主に従うためには、これら大切なものを後に捨てなければならないという戦いがあるということです。しかしその人に大いなる報いが約束されています。注目すべきは「今の世で」と言われていることです。主に従う報いはやがての天国にしかないのではない。しかも「百倍を受ける」とまで言われています。まず「家、兄弟、姉妹、母、子ども」とあります。これは主を信じて導き入れられる神の家族、教会の交わりを指すのでしょう。興味深いのは 29 節にあった「父」が 30 節には出て来ないことです。それは神ご自身が私たちの父となってくくださるからでしょう。イエス様は 3 章 35 節で、こう言われました。「だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」 私たちは神の民に加えられ、血縁を超えた、より深く、霊的に豊かな神の家族の関係に導き入れられました。この杉並教会一つをとってもそうですし、さらに日本長老教会、さらに全世界のクリスチャンたちと初めて会った時から、お互いが一つに結び合わされている豊かな家族関係にあることを体験します。そう考えると

百倍どころか何百倍、何千倍もの恵みにすでにあずかっていると言えるでしょう。また「畑」は所有物の代表と考えられますが、神を父として持つ者は今やすべてを持つに等しいと聖書は語ります（ローマ 8 章 32 節、I コリント 3 章 21～23 節等）。神がそれらのものを用いて、私たちを守り支えてくださいます。

ただしここには「迫害とともに」とも言われています。この世は天国ではありません。キリスト教信仰を持てばすべてがハッピーになるとは言われていません。この地上ではなお艱難があり、戦いがあります。そういう中でこれらの祝福を受けるのです。

そして来たるべき世で永遠のいのちを受けます。それはあの金持ちが求めていたものです。新しい天と新しい地では、苦しみも悲しみも叫びも死もありません。すべてが完全に調和した世界において、私たちはただ恵みによって救ってくださった神を親しく仰ぎ見、喜びと賛美をもって、その神と永遠にともに歩むのです。

最後にイエス様は、こう付け加えられました。「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」 この言葉には二つの理解の仕方があります。一つは、これまでの文脈に沿った理解の仕方です。「先にいる者」とは金持ちやこの世の高い地位を得ている人々を指します。そうした人々が最後には後になり、反対にこの世では低く見られ、苦しみの中にあるような弟子たちや子どもたちが先の者、すなわち神に祝福される者となるという理解です。もう一つは「先にいる者」とは、ペテロのように「自分は先頭を走っている」「すでにすべてを捨てて従っている」と自覚している人を指すという理解です。そのような人がやがて後になり、反対にそうは見えなかった人々がやがて先になるという理解です。どちらの意味に取ることも可能かと思います。一方では今、この世で先にいる者でなくても、主に従う歩みを通して、やがて「先になる」という慰めと希望を受け取ることができます。また他方では、自分は先に立っていると思い、その報いにばかり心を向けていると、思わぬ落とし穴に陥るという警告としても受け取ることができます。イエス様は 9 章 35 節で「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい」と言われました。主の弟子は、人の上に立つことを目指すのではなく、むしろ皆の後になり、仕える者として歩むことが求められています。そのような者こそ神によって高く上げられることが、ここでも改めて教えられていると受け取ることができます。

以上、今日の箇所では特に富や財産が持つ危険性が語られました。今日もお金は私たちの心に大きな影響力を持っています。インターネットを通して世界中の裕福な人の生活や、便利で魅力的な商品を目にし、私たちの食欲さは刺激されます。もっとお金があればと、豊かな人への羨望の思いを抱くこともあるでしょう。しかし今日の箇所が語っていたのは、富を多く持つ人たちは危険な状況にあるということです。富は神との関係から人を引き離し、永遠のいのちへの道から遠ざけ、神の国に入ることを難しくさせます。私たちの魂にとって極めて有害なものになり得るのです。ですから富を多く持っていない人は、この状態は良かったのだ！と思うべきです。神の守りの内に自分は置かれている！と。むしろ真に大切なことは何かを確認し、主の救いを感謝しながら、主に従うことを第一とする生活へ進めば良いのです。

一方、富を持っている人には、この箇所ははっきりと警告を与えています。神の恵みがなければ容易に永遠のいのちへの道からそれてしまう。人間的に見れば神の国に入ることがほとんど不可能な状態にある、と。しかしイエス様は言われました。「神にはできる」と。だからこそ神の恵みを切に祈り求める必要があります。虚しい富に欺かれて心を支配されることがないように。主に喜ばれる仕方で、それを用いることができるように。主が求められるなら、いつでも手放すことができる自由を持てるように。ヨハネの手紙第一 2 章 17 節に「世と、世の欲は過ぎ去ります」とあるように、これはこの世限りのものであるとの冷静な目で見ることができるように。むしろこの主からお預かりしているものについてやがて主に報告書を出す時、良い報告ができる者であるように。主により良く従うための道具として富を用いることができるように！と。イエス様は「神にはできる」と言われました。神はイエス様を通して私たちを新しい者とし、救いの道を歩めるようにしてください。私たちはイエス様を見つめ、その御言葉に聞き、祈りつつ、神に従う歩みへ進みたいと思います。その人に主は約束しておられます。その人はこの世において捨てたものの百倍を受け、また来たるべき世で永遠のいのちを受ける。この真の祝福の道を私たちも歩む者とさせていただきたいのです。